

二〇一三年度 一般一月入学試験

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は26ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

# 国語

(60分) 100点 (解答番号

1

46)

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

普段は六人体制の中央制御室も土日は二人体制になる。今日は五十代の菅野との夜勤だった。菅野は無口な男だったし、隣室での休憩時間も一人ずつだから哲は気が楽だった。

五年前、区役所の下水道課から清掃工場に転属になった時、哲はこの職場では想像していたよりはるかに広範囲の知識と、職人的な技術が必要とされることを知った。それは同僚達(1)がシユ得を重ねてきた資格の種類にも現れていた。菅野など年配の職員の中には、周囲の人間の清掃工場へのイメージに気を遣うことに疲れて、ある種の諦念(2)の中に身を沈めてしまう者もいたが、哲は、理論と技術の両方を駆使用する新しい仕事が入った。

モニタに映し出されるクレーンは、広い海底に棲む巨大な蟹(3)のように、気まぐれにごみバンカを攪拌(4)している。ごみバンカから可ネン(3)ごみをすくい上げて炉の入り口のホップへと移動するクレーンの動きは一見不規則に見えるが、全てコンピュータで制御されている。コンピュータのトラブルでもない限り、哲がクレーン制御室で手動制御を行うことはないが、異常がなくても毎日二回は機械の点検に行く。現場は常に気温プラス12度の暑さで、臭気もあるからことに夏は(4)こたえる。しかしガン来機械(5)いじりが好きだった哲は、現場作業が嫌でたまらないということにはなかった。

日勤の職員との引き継ぎを済ませて朝八時すぎに工場を出ると、その日一杯と、翌日が休みになる。哲はロッカーで着替えながら、冷蔵庫の中身を思い出してその日のパスタソースを考える。工場を出て、バス停まで歩きながら朝の日差しを眩(まぶ)しく思う。

現場作業の後で工場内の風呂に入っても、哲は家に帰ると必ずシャワーを浴びた。それからソースの準備をして、持っている数少ない贅沢(ぜいたく)品であるラゴステイーナのパスタ鍋(なべ)で湯を沸かしながらきっかり300gのパスタを計る。日勤でも夜勤でもその

習慣が崩れることはなかった。いつもなら湯がわくまで新聞を読むのだが、その日は珍しくポストに封トウが入っていた。差出人は美由だった。

哲おじさんへ

この間は、サンシャインへ連れていってくれてどうもありがとうございます。とてもきれいで楽しかったです。

今日はニュースがあります！ 今度、うちに犬が来ることになりました！ 名前はいろいろ考えて、プロキーンにしました。どうしてプロキーンなのか、おじさんにはわかりますよね？

プロキーンはコリーの女の子です。近所でたくさん仔犬こいぬが生まれて、見に行ったらあんまりかわいいんでどうしても欲しくなっちゃって、それで頼んだら、母親は旅行に行けなくなるからだめと言ったんだけど、父親は、美由がちゃんと面倒を見るならいいと言いました。父親も昔タロという犬を飼っていたからです。おじさんは覚えていますか？ 美由は親と一緒に旅行より自分の犬の方がずっといい！

旅行だったら一人旅がしてみたいです。それもヨーロッパがいいです。私は将来パリ16区のアパルトマンに住みたいのです。だって景色が日本よりずっとすてきだから！（パリがだめならソーホーのロフトでもいいです）

街をぶらぶらするのもマルシェに行くのも楽しそうだし、カフェでお茶するのもあこがれます。美術館もたくさんあるから、ぜったい飽きないと思います。高校生になったらフランス語を習いたいです。それでペラペラになったら、フランス人の彼氏が欲しいな。

昨日の夜、春の大三角形を見つけました。北極星も、多分あれかなーというのが見つかりました。本を見てほかの星も探してみます。それといつかダイヤモンドのルーシー星が見たいです。  
ではでは。

みゆより

返事を書こうとして、哲は自分がこれまで手紙など書いたことがないことに気づいた。彼は卒業論文以来、殆ど何も書いたことがない。仕事では業務日報や簡単な改善要望書、5S<sup>(注3)</sup>に沿った中期目標などを書くこともあるが、それはあくまで定型フォーマットに添ったもので、(7) 文章などと呼べるものではなかった。言葉は本や雑誌やインターネットを通して入って来たが、自分から出ていくということがなかった。職場で休憩時間に同僚の話を聞くのは嫌いではなかった。彼はそれ以上のつき合いを必要としなかったし、同僚が彼を無理に誘うこともなかった。

哲は便箋など持っていなかったから、机の引き出しに入っていたレポート用紙を取り出した。紺色のボールペンを手にして、暫く頬杖をついたまま動かなかった。おおいぬ座のシリウスにしなかつたのは、ずっと仔犬のままできて欲しいからかな、と哲は思った。

松尾 美由様

こいぬ座のプロキオンは地球から11光年の位置にあります。

(8)、今のプロキオンの光は11年後に見えます。

タロのことはもちろん覚えています。拾ってきたのは兄貴です。黒と茶のまだらの雑種犬でした。寝てばかりいる、おとなしい犬でした。

松尾 哲

書きながら、十一年後の美由は老犬の面倒をちゃんと見ているのだろうか、と思った。大人になった美由は本当に海外へ飛びだして行ってしまふのか、それとも夢なんか忘れて忙しく働いているのか、ひよつとしたら結婚しているかもしれない。二十五歳の美由がどんな女性になっているのか、哲には想像もつかなかった。しかし四十九歳の自分は、今とさほど変化がないように思われた。美由にとつてのこれからの十一年間は長くてかけがえのないものになるだろう、自分にとつての十一年は短いし、大概のことは想像がつく。上司との定期面談で希望を出せば別の部シヨ<sup>(11)</sup>へ転属になる可能性もあるが、哲は区役所に戻りたくはな

かったから、多分プロキが年老いた頃もまだ清掃工場（こ）で働いているだろう。

(12)

、三十年後、五十年後となると全く見

当がつかない。その頃の物理学の常識に自分についていけるだろうか。そこで哲は現実から離れてしまう。天体観測はどこまで進んでいるのだろうか。大人になった美由のと同じように、今からでは予想もつかない事実がたくさんあるに違いない。

タロという名前は「南極のタロとジロ」から取ったのだった。譲は、最初は熱心に犬の訓練をしたけれど、タロは譲が期待したほど優秀な犬ではなかった。お手とお座りだけは覚えたが、それより難しいことを教えても困ったように尻尾（しっぽ）を振って譲を見上げていただけだった。飽きっぽい兄が見放したタロの面倒は、結局哲が最後まで見た。だんだん動けなくなる動物とつき合うのは骨が折れた<sup>(13)</sup>。しかし、とうとう死んでしまったとき泣いたのは哲ではなく譲だった。美由がそういう点（14）で父親に似ているかどうか知らないが、生まれたばかりの仔犬が最後は自分のところに回ってくるのではあるまいか、と哲は思った。

（糸山秋子『袋小路の男』による）

（注1） ごみバンカ——ごみの貯留槽

（注2） サンシャイン——東京都豊島区にある高層ビル。水族館やプラネタリウムなどの施設がある

（注3） 5S——職場環境の維持改善で用いられるスローガンで「整理・整頓・清潔・清掃・躰（しづ）」のこと

問 1 傍線番号(1)・(3)・(5)・(6)・(11)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1  
5

(1) シユ得

1

- ① シユ向を凝らす
- ② 品シユを改良する
- ③ 新しいシユ法を使う
- ④ 物語のシユ題にせまる
- ⑤ 事件をシユ材する

(3) 可ネン

2

- ① 仕事に専ネンする
- ② ネン着力の強いテープ
- ③ ネン料を用意する
- ④ ネン季の入った腕前
- ⑤ 天ネンの素材で作る

(5) ガン来

3

- ① 対ガンの火事
- ② ガン旦を祝う
- ③ ガン迷な父
- ④ 鋭いガン力
- ⑤ ガン蓄のある文章

(6) 封トウ

4

- ① 封トウな立場で話す
- ② 仕事を担トウする
- ③ 呼びかけに応トウする
- ④ 遠足に水トウを持っていく
- ⑤ 資金をトウ入する

(11) 部シヨ

5

- ① シヨ名活動をする
- ② 責任のシヨ在を確かめる
- ③ かぜのシヨ期症状
- ④ シヨ説入り乱れる
- ⑤ シヨ民を代表する

問2 傍線番号(2)・(4)・(9)・(10)・(13)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6

10

(2) 諦念

6

- ① 状況が好転することをひたすら願うこと
- ② あれこれ思い悩まずにあきらめること
- ③ これから起こる事態を予期して覚悟すること
- ④ 納得できないことでも我慢して従うこと
- ⑤ 周囲の人の無理解に心の底から落胆すること

(4) こたえる

7

- ① 身にしみて強く感じる
- ② どうにも我慢しきれない
- ③ 体の調子を悪くする
- ④ 心を暗く沈ませる
- ⑤ 不平不満をつのらせる

(9) かけがえのない

8

- ① 金銭で売り買いできない
- ② 他の何よりも大切である
- ③ 他人から最も高く評価される
- ④ 深刻に受け止めなくてはならない
- ⑤ それ以上の値段がつけられない

(10)

大概のこと

9

① 度を越さないほどほどのこと

② 物事のいちばん肝要な部分

③ 全部ではないがほとんど大部分

④ 複雑な物事の因果関係

⑤ 広く全体を見渡した物事の成り行き

(13)

骨が折れた

10

① 手間がかかって、ひどく損をした

② 切なくて、やりきれなかった

③ 面倒なことにも、辛抱強く耐えた

④ 労力がいり、困難であった

⑤ つらいばかりで、報われなかった



問3 空欄番号

(7)

(8)

(12)

に入る語として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一

つずつ選びマークしなさい。

11

13

11 (7)

⑤ やはり  
④ およそ  
③ つまり  
② きつと  
① たぶん

12 (8)

⑤ なぜなら  
④ また  
③ けれども  
② そして  
① つまり

13 (12)

⑤ しかし  
④ すなわち  
③ ところで  
② あるいは  
① しかも

問4 傍線番号14「そういう点」とあるが、それはどういう点か。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① ペットを躡けるには熱心だが、世話は楽しめないという点
- ② 流行にのつてペットを飼ってもすぐ飽きて見向きもしない点
- ③ 当初はペットに対して熱心でも、間もなく飽きて顧みなくなる点
- ④ ペットを飼っても、忙しくなると、世話することを忘れてしまう点
- ⑤ 躡できない犬や老犬なら放置し人任せにする冷たさをもつ点

問5 本文中からうかがえる「哲」の職場の人に対する思いとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 哲は他人に無関心な同僚たちのあり方が嫌いではないが、疎外感を覚えている
- ② 哲は仕事でもプライベートでも、職場の人とはつき合おうという気は全くない
- ③ 哲は、コミュニケーションを特に必要とされない職場の人間関係を気に入っている
- ④ 哲は人と関わるのが嫌なので、職場の休憩時間に同僚と話をするのは苦手になっている
- ⑤ 哲は、職場の同僚たちとつき合うのは仕事なので仕方がないと割り切っている

問6 本文中からうかがえる「哲」と「美由」について、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

- ① 年の離れた姪との接し方にとまどい、美由の働きかけにも満足には対応できないでいる
- ② 天体や星座の観測など共通の趣味をもち、自分になついている美由とはある程度交流を楽しんでいる
- ③ いっしょに出かけたり手紙をやりとりするなど、美由との交流を唯一の心の慰めに行っている
- ④ 美由を自分の娘のようにかわいがり、何でも相談できる頼りがいのある相手として絆を深めている
- ⑤ 無責任な美由に犬の面倒を押しつけられるのではないかと危惧し、少し距離を置こうとしている

問7 本文中からうかがえる「哲」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

- ① 哲は区役所から清掃工場への転属を人生の転機ととらえ、自由気ままな生活を送っている
- ② 哲は自分で作った習慣にこだわりを持っており、規則正しい生活を崩されることに不安を感じている
- ③ 哲は清掃工場での単調な毎日が嫌いではないが、将来に展望がもてず現実から逃避している
- ④ 哲は理論と技術を駆使する今の仕事内容や職場環境に満足しており、あまり変化を求めようとしていない
- ⑤ 哲は社会や周囲の人に興味が無いわけではないが、進んで人に交われず自分の殻に閉じこもっている

16

17

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

権力や権威とかかわりなくとも、人は遠い昔から、さまざまに歴史を語り継ぎ、あるいは書きしるして受け継いできた。どのような時代であれ、世界であれ、人は一人では生きられない。他者とのさまざまなつながりのなかで、現世を営んでいる。(1)。また人は、過去の関係なしに、そのつながりなしに、まったくの断絶のなかに生きることもできない。身のまわりの両親や親族にはじまり、大は地球規模での関係性にいたるまで、良かろうが悪かろうが、生まれ落ちた世界がすでに歴史を背負って構成されてしまっている。好むと好まざるとにかかわらず、いつでも現時点は、まったくの(2)からの出発ではありえない。現に生きているわれわれ自身の行為が、時が過ぎれば、ただちに過去の世界のものとなって、未来の現時点にたいしてなにかの影響をもってしまう。

こうした人のあり方を念(3)トウに置くとき、歴史を問うということは、じつは現在を問うことと不可分に成立している認識行為にほかならない、ということが分かる。もちろん、歴史とは過去についての認識である。過去に生きた人たちが、どのような条件のなかで苦闘していたのか、あるいはどのような知恵を働かせて技術を開発し、生きるための協調関係を築いていたのか、どのような闘争の果てに政治支配が展開していたのか。こういった問いは、問う人の関心に応じて果てしなく続けることができるであろう。それらを問うのは、現に今を生きているわれわれ以外ではない。

いや、過去において人びとが紡ぎだしていた歴史は厳然と実在していたのであるから、それを実体としてあきらかにすることが目標ではないのか。こういう疑念もありえよう。しかし残念ながら、われわれにはタイムマシーンはない。過去を丸ごとじつさいに追体験することはできない。実体的な意味での全体史は、残念ながら見果てぬ夢である。(6)

このことは、ちよつと自分の体験を振り返ってもらえば、よく分かるはずである。一時間前でも昨日でもよいのであるが、過ぎ去ったわれわれ自身の体験を想起してみよう。たとえば写真や資料が保存してあったとしても、みずからの経験の全体的で正確な復元がとてみできるものではないことを、ただちに思い知るはずである。まして、経験のなされた場についてとなれば、余計

である。忘れるという記憶の問題ではなくて、そもそもわれわれの直接的経験には認識の限界がともなわれている。眼前にあるものですら、われわれはすべてを識別して記憶にとどめているわけではないのである。

歴史像は過去の実体、ないし現実そのものではない。歴史的過去について、現在を生きている人がある関心をもつて問いを發することによって、はじめて歴史像を構築する道が開かれる。すでに触れたように、問いは限りなく多様でありうる。過去にあつたなにかについて知りたい、昔はどうであつたのか、という好奇心や、現在関心をもつていことがらの歴史的な変<sup>(8)</sup>セ<sup>(8)</sup>ンを知りたい、といった知的興味もありうるであろう。あるいは、現在の問題を解くための知恵を、過去の歴史から汲<sup>く</sup>み取りたい、という願望であるかもしれない。

たしかにどのような問題であれ、現在と過去とでは、また過去でも時代や場所によつて、問題を取り巻く歴史的な諸条件は違っている。歴史的脈絡が異なる以上、手<sup>(9)</sup>輕に現在への処<sup>しよ</sup>方<sup>ほう</sup>箋<sup>せん</sup>を得ようとするような単純な教訓史観は成り立たない。あるいは反対に、現在の基準で過去のあり方を判断してしまうような時代錯誤は、避けなければならない。

そのうえで、われわれは過去を問うことで、現在の歴史的な根柢をあきらかにし、その歴史性を明確にすることを、意識、無意識を問わずおこなっているのではないだろうか。過去に照らして、現在の位置を明確にしている、ということである。

べつの角度からとらえるならば、歴史的過去について問い、歴史像を構築することをつうじて、われわれは現在の<sup>(10)</sup>を問ひ直すことができる、といつてもよい。いま当たり前と見なされていることがら、当然と判断されていることが、どこまでほんとうに当たり前であるのか。あるいは、いつから当然のことと見なされるようになったのであろうか。それはどこまで妥当な認識であるのか。もしかしたら、別の判断が、選<sup>え</sup>択<sup>たく</sup>が、ありうるのではないか、あるいはありえたのではないか、そういう点検であり、検証である。

司馬遼太郎にしても塩野七生にしても、歴史小説は多くの人の関心をとらえて人気が高い。辻邦生のいくつかの歴史小説は、歴史書よりもはるかに歴史のダイナミズムを伝えて余りあるような、高度な質をそなえている。歴史小説は意図的にフィクションを挿入することで、歴史的場面をそれらしく生き生きさせる。史料を読み込むことから、想像の人物を創作して欠落部分を補

い、実在しない史料があるがごとくに描き挿入することで、対象としている時代の雰囲気を読み手に伝え、物語の質を高める。小説である以上、虚構があっても構わない。というより、虚構であつて当然である。問われるのは、虚構の挿入が時代錯誤とならずに、読み手を歴史の場面にいるかのごとくに誘<sup>いざな</sup>えるか否か、いわば物語の叙述の質以外ではない。

学問的認識を求める歴史学の叙述では、たしかに叙述の質が問われることは同様なのであるが、しかしフィクションの挿入はもちろん許されない。推論は必要とされるが、それが推論だということが明示されることも必要である。歴史の過去について問い、歴史像を構築しようとする行為、つまり歴史研究と歴史叙述は、まったく史料的な根拠なしにでも物語を作りだす創作行為とは違<sup>ちが</sup>う。<sup>(11)</sup>歴史学と文学との基本的な相違である。

歴史学の作法にあつても、こうではないであろうか、という自分なりの仮説は、考察のさまざまな場面において必要である。その場合の仮説は、各自がそれまでに蓄積してきた知のストックから立てられてくる、あるいは先行した史料群の読みからとりあえず導かれる、ということが普通であろう。仮説は、考察が進行するに依<sup>よ</sup>りて変化して不思議はない。最終的な解釈や歴史像が、出発点における仮説からおおきく離れていることも起こりうる。もちろん、自分の仮説に都合のよい史料だけを拾い出して根拠にするような、愚かな行為があつてはならない。まして、ありもしない史料をあるかのように振る舞えば、学問においては、それは許されない捏造<sup>(12)</sup>にほかならない。

できるだけ多様な史料をつき合わせ、多様な研究を踏まえるという、手間隙<sup>てまひま</sup>のかかる、職人的ともいえるような仕事が、歴史の研究にはどうしても欠かせない。そのうえで、大方の納得できる史実があきらかにされ、それらにもとづいた歴史認識とその解釈が、さまざまな分野についてなされ蓄積されてきた。それが歴史学という学問である。

たしかに史料の読みや理解そのものに解釈がつきまとうから、事情は単純ではない。しかしおおまかにいえば、以上のような手続きが、作り話ではない学問としての歴史叙述には、不可欠だということである。それでもなお、新たな史料が発掘されることで、史実の了解そのものが変更をよぎなくされることもある。あるいは新たな解釈が導かれ、<sup>(13)</sup>ジュウ前とは異なつた歴史像につながることもある。そういう意味で、歴史とは、つねに再解釈に向かつて開かれた知にほかならない。歴史学における客観性

とは、それ以上ではない。<sup>(14)</sup>

近代歴史学の学問的な作法が成立した以降にあつても、さまざまな史実を組み合わせ導かれ定説と見なされていた歴史解釈や歴史像が、変更や転換をよぎなくされることがあつた。ここで事例を詳述することは避けるが、フランス革命やロシア革命、あるいは中国革命といった、大きな出来事を想起すれば分かりやすいのではなからうか。ぎやくに個別の例で歴史的な人物像やその評価といった、個人にかんする事例を想起してもらうのも分かりやすいかもしれない。

そのような解釈の変更とか歴史像の再構築といった事態は、<sup>(15)</sup>誤認や遺漏に由来しているとは限らない。それはもつと

<sup>(16)</sup> などところにかかわっている。

<sup>(17)</sup> 、あまたある史実のなかからなにを組み合わせ解釈し、どのような歴史像を描くかには、つねに描くその当事者である歴史家の取捨選択、すなわちなんらかの価値判断が不可避免的に関与せざるをえない、という現実に由来しているのである。

しかし、あわてて付け加えておく必要があるかもしれない、だからといって歴史像を構築する意味が失われるわけではない、ということ。人は不可避的に、そのようななかで粘り強く、歴史への問いを発しつつけるほかはないのであるから。そしてまた、根柢薄弱なまま手前勝手な価値判断を述べたにすぎないような歴史解釈の羅列は、知的に哀れな姿をさらす愚昧な行為<sup>(18)</sup>以外でないことも、言わずもがなではあるが<sup>(18)</sup>フ記しておこう。

(福井憲彦『人類はどこへ行くのか』による)

問1 傍線番号(1)・(5)・(6)・(12)・(15)の本文における意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ  
選びマークしなさい。

18

22

(1) 現世を営んでいる

18

- ① 生業を営み暮らしている
- ② 日々の生活を送っている
- ③ 現実を直視している
- ④ より良い生活を目指している
- ⑤ 現在の生活に納得している

(5) 追体験

19

- ① 他人の話を聞いて自分が体験したかのような錯覚に陥ること
- ② 他人の経験を自分の体験として感じること
- ③ 他人の体験と同じ体験をして感想や感情を共有すること
- ④ 過去にさかのぼってその事実を詳しく調べること
- ⑤ 過去の出来事や人物を懐かしく思いしのこと

(6) 見果てぬ夢

20

- ① いつまでも醒めない夢
- ② 得るやいなや失われるはかないもの
- ③ かつて見たことのある夢
- ④ 誰も見たことのない理想郷
- ⑤ 実現の不可能な願望



23 (2)

⑤ ④ ③ ② ①

完璧 無心 現在 無為 白紙

24 (10)

⑤ ④ ③ ② ①

客観性 自明性 合理性 偶然性 重要性

問2 空欄番号 (2) (10) (16) (17) 23 (26) に入  
 る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中  
 からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

(15) 遺漏

22

⑤ ④ ③ ② ①

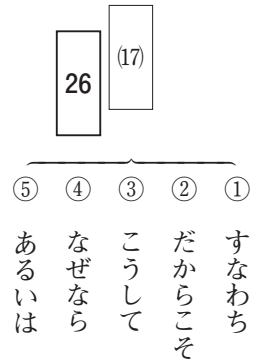
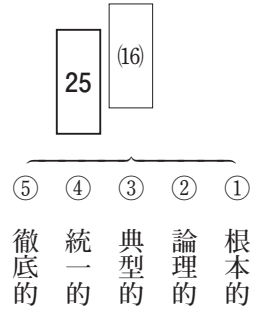
一部分的なもれ  
 学識が足りないこと  
 取捨選択の誤り  
 偏ったものの見方  
 一部の取り違え

(12) 捏造

21

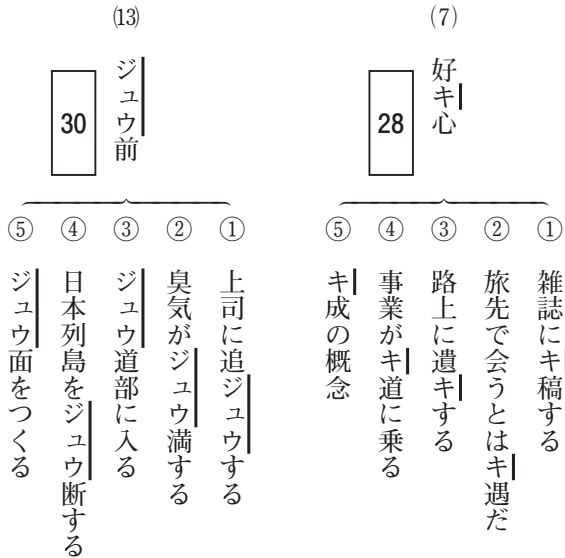
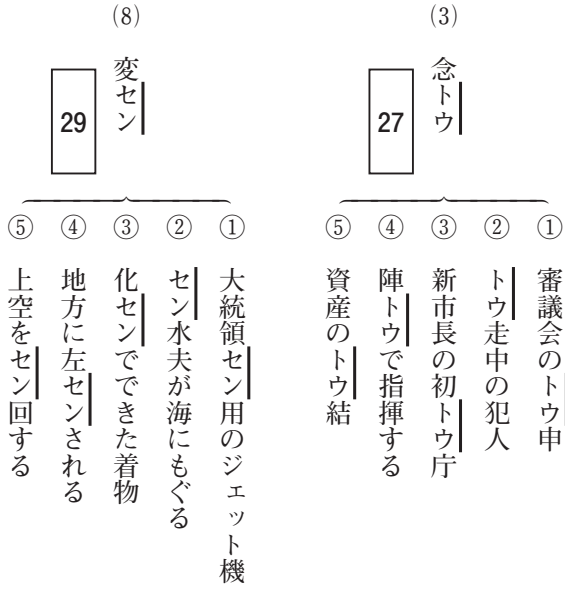
⑤ ④ ③ ② ①

不確かな情報を平然と公表すること  
 にせの事柄を事実のようにこしらえること  
 物事を新たに作り出すこと  
 人目を欺きだますこと  
 真相を隠し表面を繕うこと



問3 傍線番号(3)・(7)・(8)・(13)・(18)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

27  
31



(18)

フ記

31

- ① 父は単身フ任だ
- ② フ担が大きい
- ③ 問題がフ上する
- ④ 条例を公フする
- ⑤ 大学にフ属する病院

問4 傍線番号(4)「歴史を問う」とあるが、「歴史を問う」とはどういうことだと筆者は考えているか。最も適切なものを、次

の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

32

- ① 歴史を問うことで、人は他者とのつながりの中で生きていることを改めて認識すること
- ② 過去を正確に復元することをつうじて、歴史を実体としてあきらかにすること
- ③ 過去を問うことで、現在の歴史的根拠をあきらかにし、現在の位置を明確にすること
- ④ 歴史について限りなく多様な問いを発することで、知的興味を満足させること
- ⑤ 歴史的過去を問うことで、過去の基準で現在の判断や選択の妥当性を検証すること

問5 傍線番号(9)「現在への処方箋」とあるが、その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 過去の歴史に現在の事件や問題の原因を求めるやり方
- ② 過去と現在を比較対照しながらより良い未来を模索するやり方
- ③ 過去の歴史から現在の問題を解決するための知恵を得ようとするやり方
- ④ 過去の歴史上の失敗に照らして考え現在の危機を未然に回避しようとするやり方
- ⑤ 過去から現在に至るまで変化することのない共通の価値観を見いだそうとするやり方

問6 傍線番号(11)「歴史学と文学との基本的な相違」とあるが、それは何か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 歴史学は虚構を排するが、文学はフィクションを意図的に挿入することにより物語の質を高める
- ② 歴史学では叙述の質は問題ではないが、文学では叙述の質さえよければ高い評価を得る
- ③ 歴史学では考察の前に自分なりの仮説が必要であるが、文学では何より推論のユニークさが求められる
- ④ 歴史学ではいかに多くの史料を読み解くかということが重要であるが、文学では史料はそれほど必要とされない
- ⑤ 歴史学では既存の史料を検証する地道な努力が不可欠だが、文学では新たな史料の発見が有効な手段である

問7 傍線番号14「それ」は何を指しているか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① 多様な史料を踏まえた多様な研究
- ② 大方の納得できる史実にもとづく歴史認識
- ③ 常に再解釈に向かって開かれた知
- ④ 史実に対する歴史家の価値判断
- ⑤ 粘り強い歴史への問いと解釈の羅列

問8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

36

- ① 歴史を解釈することは、今を生きるわれわれがより良く生きることを考える上で不可欠な行為である
- ② 自分の仮説に都合のよい史料だけを抽出して根拠にしないように、自分なりの仮説を立てる際には十分配慮が必要だ
- ③ われわれが史料によって紡ぐ歴史的過去は、知的興味などによって発された問いの答えであり虚構にすぎない
- ④ 現在の歴史的根拠は過去を問うことで明らかになるが、それは現在の基準で過去を判断する時代錯誤と表裏一体である
- ⑤ 多様な史料を組み合わせて定説とされていた歴史像の変更や転換には、歴史家の価値判断が不可避的に関与している

第三問 次の文章は『なぐさみ草』の一節で、筆者が都を旅立ち、東海道を下って尾張の国の黒田に滞在したときの文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

足近・及なども、おなじやうに越え過ぎぬ。黒田といふ所に、いにしへ嬰児のほどよりはぐくみし人の、今はまことの親のよすがにてありと聞きし、道よりもたづぬべき所、人に問ひなどして案内したるに、かぎりなく聞き喜びつつ、さるは親めく人も都にあるほどなりしを、若き心にとかくいたはり慰めなどしつつありふるに、たづき出できぬる心地して、都の物語などしつつ、明け暮らし侍りしもあはれなり。

かくてやうやう卯月になりぬ。この所のさま、前も後ろも田の面にて、林は軒近く、いささ群竹めぐれり。民の家所々、萱が軒、蘆の垣ほさへ、さながら夏麻の陰に隠され、蓬・葎に門を閉ぢたり。都より東へ行きかふ旅人の過ぐる堤の道も、ただこの垣ほのほかなれば、群がり通る駒の足音も、物騒がしきをりもあるべし。早稲田におり立つ田子の、声々にうたひ、夜は蛙の耳かしましきなど、珍しき心地ぞせし。庭の木の下に卯の花のほかに咲きたるを、

夜もすがら光は見せよむば玉の黒田の里に咲ける卯の花

墨染めの黒田の早苗とる賤の夕べをかけて袖濡らすらむ

この所は、古き歌枕などにもよめる歌見えす。黒田川はあれども、美濃の国とかや、たづぬべし。

都の風の便りに、こなたかなたより文などことづつ侍りし。あはれしるばかりの歌などもありしかども、わざと書き入れず。つれづれなるままに、近き寺におはします地藏に参り、老僧の昔物語するなどに語らひよりて日を暮らすを、この頼もし人と思ひつる宿守さへ、とみのこととて京へのぼりにしかば、すべて知る人もなし。

『なぐさみ草』による

(注1) 足近——現在の岐阜県羽島市足近町

(注2) 及——現在の岐阜県羽島郡笠松町北及の辺り

(注3) 黒田——現在の愛知県葉栗郡木曾川町黒田の辺り

(注4) 萱が軒——萱で葺いた屋根

(注5) 蘆の垣ほ——蘆で作った垣

(注6) 夏麻——丈の高い夏の麻

(注7) 葎——繁茂した雑草

問1 傍線番号(1)・(5)・(8)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。 37

く

39

(1) とかくいたはり慰めなどしつつ

37

① ひたすら話をして気持ちをなだめあつては

② なにやかやと気にかけてなごませるなどしては

③ わけもわからず病気になるって看病しながら

④ そつと静かにそばに寄り添い心を通わせては

⑤ そのまま仲良くお互いを思いやっては

(5) かしがましき

38

① 美しい

② 恐ろしい

③ あわただしい

④ 神々しい

⑤ 騒々しい

(8) とみのこととて

39

① 風情を感じさせることがあるということ

② 思いがけないことがあるということ

③ 急ぎのことがあるということ

④ 楽しいことがあるということ

⑤ しなければならぬことがあるということ



問2 傍線番号(2)「たづき出できぬる心地」とあるが、これは誰たれのどのような気持ちを表しているのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

40

- ① 作者の、幼いころ面倒を見た子の本当の親が都にいとわかって、自分が都に戻るきっかけができた満足する気持ち
- ② 作者の、幼いころ面倒を見た子と再会して、頼りになる縁者ができたようだと喜ぶ気持ち
- ③ 作者の、幼いころ面倒を見た子が本当の親と巡り合ったので、親子の縁の深さに感動する気持ち
- ④ 作者が幼いころ面倒を見た子の、本当の親が見つかったので会いに行こうと決心する気持ち
- ⑤ 作者が幼いころ面倒を見た子の、作者が自分を探し出してくれたことに感謝する気持ち

問3 傍線番号(3)「卯月」は旧暦の何月か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

41

- ① 一月
- ② 二月
- ③ 四月
- ④ 七月
- ⑤ 十一月

問4 傍線番号(4)・(9)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。 42 ・ 43

(4) 垣ほのほかなれば

42

- ① 名詞＋格助詞＋形容動詞の已然形＋接続助詞
- ② 名詞＋格助詞＋名詞＋ラ行四段活用動詞の已然形＋接続助詞
- ③ 名詞＋形容動詞の已然形＋接続助詞
- ④ 名詞＋格助詞＋名詞＋断定の助動詞の已然形＋接続助詞
- ⑤ 名詞＋格助詞＋ラ行四段活用動詞の已然形＋接続助詞

(9) のぼりにしかば

43

- ① ラ行四段活用動詞の連用形＋完了の助動詞＋過去の助動詞＋接続助詞
- ② ラ行四段活用動詞の連用形＋格助詞＋サ変活用動詞の連用形＋係助詞＋接続助詞
- ③ ラ行四段活用動詞の連用形＋断定の助動詞＋過去の助動詞＋接続助詞
- ④ 名詞＋断定の助動詞＋副助詞＋係助詞＋接続助詞
- ⑤ 名詞＋終助詞＋接続助詞

問5 傍線番号(6)・(7)の和歌の説明として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① (6)の和歌は、二句切れで、倒置法が用いられている
- ② (6)の和歌は、「黒田」の黒と「卯の花」の白の色彩の対比を感じさせる
- ③ (7)の和歌は、三句切れで、四句目の「夕べをかけて」が掛詞かけことばになっている
- ④ (6)の和歌には「むば玉の」という枕詞が用いられている
- ⑤ (7)の和歌は、農夫の働いている情景を心に思い描いて詠んでいる

問6 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 黒田を詠みこんだ和歌はないが、黒田川の和歌はあり、黒田と黒田川は同一だとわかった
- ② 黒田という所は、風流なものがたくさんあり、人は少なくとも静かだった
- ③ 黒田という所で暮らしたのは、黒田を詠みこんだ和歌を探すためであった
- ④ 退屈なのに任せて、近くの寺に参詣さんげいし、その老僧と話をして過ごした
- ⑤ 都から手紙が届けられたが、わざわざ書き記すほどの内容のあるものではなかった

問7 本文の典故である『なぐさみ草』は、室町時代に成立した紀行文であるが、同じ時代に成立した作品として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

- ① 十六夜日記
- ② 今昔物語集
- ③ 奥の細道
- ④ 風土記
- ⑤ 風姿花伝